

## 研究ノート

# 女性と男性はなぜ違うのか

—フェミニスト心理学からの考察—

森 永 康 子

大学で「女性学」の講義を担当するようになって、10年近くになる。講義では、女と男の差異を生み出すものは何かというテーマについて「ジェンダー・ステレオタイプ」という点から説明を行ってきた。女と男の違いは身体的にもそれほど大きなものではないということや、ステレオタイプを持つことで他者理解が歪み、また自らもステレオタイプにそった行動をとるため、女と男は実際の差異以上に違っているように見えるという話をしてきた<sup>1)</sup>。しかし、講義後の学生の感想には、「そうは言っても女と男はやっぱり違う」「違わなければ女と男が存在する意味がない」という種類のものがしばしば含まれている。学生が「女と男は違う」という考えをそこまで強固に持っているのはいったい何によるのであろうか。しかしながら、こうした「女と男は違う」という考えは、学生のみならず、自然科学や社会科学などの学問領域においてもその底辺を流れ続けてきており、性差は過去も現在も心理学の中では大きな研究テーマの一つとなってきたのである。本稿では、こうした性差について筆者が現在考えていることを述べてみたい。なお、筆者は、これまでに読んできたフェミニスト心理学の文献からさまざまな影響を受けており、また、こうした文献のすべてを網羅したということもない。したがって、本稿で述べていることが他の研究者の主張と重なるところや、勉強不足による未熟な考察になっているところも多々あると思われる。多くの方からのコメント等を望む。

## 1 なぜ人は性差に寛容なのか

心理学の研究にはいくつかのルールがある。例えば、研究対象を身体的にも精神的にも傷つけてはいけない、秘密を保持しなければならないなどの研究の倫理であり、こうした内容はアメリカ心理学会の倫理綱領 (*Ethical Principles of Psychologists*, American Psychological Association) にも掲載されている。その中にも明示されていることではあるが、心理学者は自分の研究が社会にどのような影響を与えるかを考慮せねばならない。このような社会的な責任があるためか、現代の心理学者があまり取り上げないあるいは取り上げるのを避けている研究テーマがいくつかある。そうしたテーマの中の一つに、研究結果が現状の差別を肯定する可能性のあるものがあげられよう。

数年前出版された *The Bell Curve: Intelligence and Class Structure in American Life* (Herrnstein & Murray, 1994, Free Press) には、知能が遺伝によって決定されることや、アメリカに暮らす人々の知能指数がその人種により異なっているという主張が含まれていた。この本の出版案内には、この種の研究が大変な議論を巻き起こしてきたものであること (The seminal book about IQ and class that ignited one of the most explosive controversies in decades)、さらに、この本がタブーを破る (Breaking new ground and old taboos) ものであると記されている (Amazon.com に掲載された Editorial Review, book description より)。そして、出版されるやいなや多くの反論や批判が巻き起こった。人種による知能の優劣についての主張は現状の貧富の差を肯定するものであるとの批判や、知能は学習環境などの社会的な要因によってかなり変動するという反論など、さまざまであった (*Time*, 1994/10/31)。このように、現状の差別問題を肯定するような研究内容は大きな問題となり、社会的にも学問的にもさまざまな批判を受けるのである。

ところで、いくつかの民族やさまざまな地域に住む人々の間で、測定された心理学の変数に何らかの差異が見られたとき、その差異の原因を生物学的な要

因ではなく、社会的な要因によるものであると解釈するのは心理学では常道である。対人コミュニケーション（大坊，1998など）、自己概念（北山，1998など）や性役割態度（Morinaga, Frieze, & Ferligoj, 1993など）、さらには虫の声を音と知覚するか言語として知覚するかといった、角田忠信博士による日本人と西洋人の音処理の脳の機能（利島，1987）などにおいて、いくつかの地域で得られたデータ間で違いが報告されたとき、その差異は対象となった地域の社会制度、社会構造や文化の違いに基づくものであると説明されることが多い。

しかし、心理学的変数における性差に関する研究については、こうした傾向といささか異なった様相を示す。性差は、心理学のさまざまな研究領域で報告されるし、研究の主要な目的が性差を見いだすことなくとも、研究の参加者が女男であった場合には性別を変数の一つとした分析が行われるのが主流である。そして、こうした研究で報告された性差は、たとえそれが現在の差別構造を肯定するものであらうと、*The Bell Curve* の際に見られたような大きな反論は生じないのが普通である。

このような性差に対する寛容さはなぜ生じるのであらうか。その理由の一つは、女男が違っていることは自明のことであり、したがって、心理学のみならず他のいろいろな学問領域の研究で報告された性差は新たな発見である、あるいは、すでに報告されている性差を確認またはより厳密に検討した結果であるという認識の存在であらう。また、心理学の分野においては、何らかの心理学的変数に関する性差は数多くの研究で報告されており、性差は心理学においてはよく見られる現象なのである。

では、女男が違っているのは当然という認識はどのように作られるのであらうか。日常生活を送るうえで、服装、持ち物、公共の場でのトイレ、玩具など女男を区別しているものは多い。さらに、人間のみならず、身の回りの動物を対象としたものでも、メスとオスの行動の違いについての情報も数多く見られる。動物番組では動物の親子を人間の親子にたとえ、メス（母親）とオス（父

親)の生殖や育児行動の違いに言及するものもよく見受けられる。これほど女男の違いを情報として受け取っておれば、性差があることが当然というような認識が生じるのはやむを得ないだろう。つまり、社会が性別によって分類されているため、人々は性別によって分断されるという認識を持つのである(Bem, 1993)。したがって、心理学の研究により報告される性差の情報は、これまでの知識と一致する新たな情報の断片を付け加え、既存の知識を強固にするだけなのである。

性差に関する寛容性のもう一つの理由として考えられるのは、何らかの性差が見られたとき、それは「女だから」「男だから」と説明されると人はそこで思考を停止してしまうということがあるのではないだろうか。性差は一般に同じ地域に住む女男を比較して得られた差異であり、その点では地域差や文化差には帰属しにくい。そこで、遺伝的・身体的・生理的な原因すなわち生物学的な要因<sup>2)</sup>に帰属されることになるのだろうが、生物学的な女男の違いが、心理学的な面での性差を説明するものとなっているのである。ある2つの異なる条件下で何らかの心理学的変数において差異が見られたときに、それが性差であれば、それ以上の説明は不要であり、「女だから」「男だから」というだけですべてが理解できたように思えてしまうのである。そこには「解剖学的な違いがすべてを支配する」と言うフロイトの発想と近いものがうかがえる。また、他者の行動を観察したときに、人はその行動の原因を行為者の内的な属性に帰属する傾向を持っている(坂西, 1986)が、性別への帰属はその一つとも考えられる。女か男かという性別は状況や時間を越えて安定し一貫したものであるため、行為の原因を帰属しやすいと言えよう。

では、「女だから」「男だから」という説明はいったい何を意味するのであるか。それは多くの場合、性を決定する遺伝子、胎児期に浴びた性ホルモン、生殖に関連する身体の構造、生後のホルモン・バランスなどにおける違いを意味すると考えられる。例えば、男性の攻撃性は女性よりも高いと報告されているが、これはY染色体や男性ホルモンなどから説明されることが多い(ブラ

ム、2000など)。また、胎児期に浴びたホルモンによる脳の女性化あるいは男性化により、誕生後の好みや行動が影響されるという考え方もある。

また、最近注目を浴びるようになった進化心理学もそこに一役買っているようだ。進化心理学は本来、配偶者選択や性行動を進化論の仮説をもとに説明するものである (Buss, 1995)。しかし、狩猟に出掛けるために空間認知能力を進化させた男性は地図が読め、子どもを育てるために他者の助けを必要とした結果、言語能力を進化させた女性は言語表現に秀でているとして説明する『話を聞かない男、地図が読めない女』(アラン&バーバラ・ピーズ著、主婦の友社、2000)のように、配偶者選択や性行動を越えて、心理学的変数における性差を進化論的に説明をしているものもある。このような説明は、Y染色体やホルモンの話に比べよりいっそう理解しやすいためか、一般に受け入れられているようである。

また、上述したように、日常生活で我々は、人間のみならず多くの動物の行動を目にする。そこでは、主に生殖と子育てに関してメス・オスの行動の違いが明らかに見られることが多い。このような動物行動の違いは本能という名のもとに生物学的に決定されているものと見なされる。そして、メス＝女、オス＝男という図式から、人間も生物学的な要因によって女男の生殖や育児に関する役割や行動が決まっていると考えやすい。そして、生殖・育児行動における性差から他の心理学的変数における性差へとつながっていくのであろう。

## 2 フェミニスト心理学の立場からは何が考えられるのか

さて、こうした生物学的な思いこみに対して、フェミニズムの影響を受けた心理学者はどのような反論をしてきたのだろうか。フェミニスト心理学者の持っている態度は、立場の違いはあるものの、多かれ少なかれ、心理学的変数における性差に対する生物学的な要因の支配、言わば生物学的決定論のような風潮を退けようとするものだと言えよう。残念ながら、その試みは成功しているとは言えないが。

では、なぜフェミニスト心理学者は生物学的な要因から目を遠ざけようとしているのだろうか。それは、人種や民族などの場合と同様、性差があったという報告が現状の社会構造を肯定し説明するものとして用いられることを知っているからではないだろうか。研究の結果は、研究者にとってはたとえどんな性差であっても興味深いものである。しかし、性差があること自体が社会で認知されるようになると、それが一つの説明原理としての働きを持つようになる。例えば、男性の方が女性よりも攻撃性が高いという報告がされると、それは現状の女性に対する男性の暴力を説明するようになる。そして、攻撃性が生物学的な原因に帰属されれば、男性の暴力はとめることができないものと見なされてしまうだろう。また、女性の方が男性よりも、非言語的な手がかりを読み取るのが優れているという報告は、女性の方が言葉の不自由な人間の世話が上手であるのだから、育児や介護に向いているという説明がなされる。女性の非言語的な読み取り能力が生物学的なものに帰属されれば、こうした役割や職業が女性向きのもの、女性の特性をいかしたものとして固定されていくだろう。これらはすでに現実に生じていることであり、生物学的な原因に帰属している限り、性別に固定された社会状況を変えることはできないのである。

生物学的決定論から離れるためには、生物学的な性別はそれほど重要ではないということを主張する必要があるだろう。その一つの方法は、生物学的な性別よりも心の性別<sup>3)</sup>の方が重要であるとする事だ。例えば、心理学的な特性の中でも、女性性（女らしさ）、男性性（男らしさ）に注目した Bem（1974）は、女性でも男性でも女性性と男性性を兼ね備えている個人がいることを示唆した。この Bem の主張がフェミニスト心理学にもたらした功績の一つは、女性性と男性性が独立したものであるという考え方を広めたことにあるだろう。女性性が高いということは男性性が低いというように、女性性と男性性は対立するもの、つまり次元上に並ぶものと考えられがちである。しかし、Bem は女性性と男性性は独立したものであり、両方をともに身に付けている個人の存在を示唆した。これが心理学的両性具有性（psychological androgyny）であ

る。これは、自己概念としての女性性、男性性と考えられる。

この考え方が示唆されて以来、両性具有性に関する多くの研究がなされてきた。しかし、いまだに生物学的な性の変数にとって変わられるものではないと思われる。つまり、自己概念としての女性性や男性性と関連するような変数、例えば、心理学的な適応、自己評価あるいは不安などでは、生物学的な性別よりも Bem の作成した指標の方がよりよく予測するという結果もある(東, 2000 など)が、心理学の多くの研究では検討の対象になっていないのが現状であろう。大きな問題は、女性性や男性性が固定されたものではないということではないかと考えられる。例えば、同じ一人の女性でも、思春期には女性性が高く成人期には男性性が高くなるというように、個人の発達とともに女性性や男性性の得点も変化することも多いだろう。また、社会や文化の時代的な変化により「女性性」「男性性」の内容も変わってくると思われる。20年前には「女性性」の得点が高いと判断されるような得点を示していても、20年後には使用された項目内容から、それは女性性ではないと判断されるかもしれないのである。そして、何より、女性性の高低や男性性の高低は、尺度によって測定されその得点の分布により判断される。つまり、この概念はあくまで相対的なものにしか過ぎないのである。しかし、この Bem の考え方は、生物学的な性別が絶対的なものではなく、心理学的な側面からも性を分類できるという新しい示唆を与えたものと言えよう。

次に、現在、フェミニスト心理学者の中で大きな主流となっている社会構成主義的な立場について紹介しよう。これは、心理学の研究で報告されてきた性差の多くは、社会の構造や個人のおかれている文脈によって作られたものであると考えるものである。細かいところではその考え方もさまざまであるが、共通する前提に、女性は男性に比べて社会的に低い地位にいるという社会構造の認識がある。社会的な地位とは持っている権力 (power) の大きさによって理解できるだろう。

例えば、非言語的な手がかりを読み取る能力も、権力を媒介させると、女男

に関わらず、権力を持たない者は権力を持つ者の非言語的な手がかりを読み取る能力が高くなるという実験報告もある (Yoder, 1999による)。女性は、社会的地位が低く権力を持たない立場におかれることが多いので、男性に比べると他者の非言語的な手がかりを読み取るのが優れていると解釈できるのである。男性の攻撃性も、「男は成功し、タフでなければいけない」というような男らしさの社会規範が存在するため、抱えている精神的な問題を他人に打ち明けることができず、たまったストレスを発散するため、自分に危害をもたらさないであろう女性を選んで暴力に訴えているとも解釈できるのである。

このように、社会構成主義では、心理学の変数における性差に関して社会的な要因を重視する。生物学的な女男の違いを否定するものではないが、それらに帰属されやすい性差について、社会的な要因による影響という他の解釈の可能性を示唆するものと考えられる。ここで大切なのは、性差が社会的に作られたものであるならば、それは人々による変革が可能であるという点である。

生物学的に性を二つに分けることは、直接には地位や権力とは関係しない。地位や権力は社会的なものである。ここで、生物学的な分類としての性 (セックス) と社会的な分類としての性 (ジェンダー) を区別する必要性が出てくる。セックスとジェンダーの区別は厳密には難しいのが現状であり、同じ性差を両方の立場から解釈できるというあいまいさは残り続ける。また、多くの社会で女性よりも男性の方が攻撃性が高いというデータが得られたならば、それはジェンダーによる影響というよりもセックスの影響として説明するほうが簡単であり納得されやすい。そうした単純な因果関係の中に社会の権力や地位の構造つまりジェンダーの概念を入れるのは、説明を複雑にすることにもなる。つまり、ジェンダーの概念は生物学的な差異と心理学の変数上の差異の間の、途中の段階にもう一つのステップを入れることになり、人々の思考に余計に負荷をかけることになる。しかし、ジェンダーという概念を用いることにより、社会的な分類に結びつきやすい権力や地位という点からの性差の再解釈への可能性が生まれるのである。



また、フェミニスト心理学の立場から、性差の生物学的決定論を批判するものとして、性差があった報告をした研究そのものに対する疑問も提出されている。それは主に、実証主義（positivism）心理学研究の客観性（objectivity）に対する批判として取り上げられてきた（Unger & Crawford, 1992など）。実証主義的な心理学は研究を行う際の客観性、例えば、実験者の中立性、仮説の根拠、データの分析法、そして結果の再現性などを重視してきた。このような研究方法は一見客観的で厳密な科学の装いを保っている。しかしながら、心理学の研究では、テーマを選ぶという研究のそもそもの始まりから、研究者の恣意が意図しようとしなかつたと多分に含まれるのである。性差について研究するというテーマを選ぶのは性差に興味があるからであり、その時に、もし、研究者が「女男が違うのは当たり前」と考えていれば、性差が出てくる方向で仮説をたて独立変数を操作するであろう。もし、仮説通りの性差が統計的検定の結果見いだされなければ、実験は失敗と見なされ、その結果は報告されないだろう。仮説通りの結果あるいは条件間で何らかの差異を得るため、研究者は、実験室の様子、実験者への訓練、実験器具の操作、被験者あるいは参加者の選定、条件の統制方法、データの分析方法など、あらゆることを考えるのである。こうした研究では、科学的と言われる実験室の中で、権威を持った研究者（実験者）と何も知らない被験者（参加者）との間で権力関係を生じさせ、被験者（参加者）は研究者（実験者）の暗黙の要求に従わざるを得ず、研究者の期待通りの行動をとるということも考えられるのである。

また、上述したように、心理学の研究では条件間で何らかの差異が見られたときのみ、報告される傾向がある。性差に関する研究も何らかの性差があったときにのみに報告されているならば、現実には差異がないものが多いにも関わらず、性差があるものばかりが目につき実際よりも性差があるように思われるだけなのかもしれない。

こうした研究方法そのものへの批判は、フェミニスト心理学の立場からの研究方法へともつながっている。女性の声に耳を傾けようとするその方法は、Gil-

ligan (1982) などに代表される主に質的なデータの収集である。もちろん、こうした質的なデータは逆に実証主義心理学の立場からその客観性に対する批判を受けるのであるが、これまでの実証主義心理学ではあまり検討されてこなかったテーマを拾っていくには、適切な方法であるとも考えられる。

### 3 最後に

女子大学生が、女性学の講義を聞いた後「でもやっぱり女と男は違う」「違わなければ存在する意味がない」と、女男の社会的な違いを肯定的に述べようとするのは、彼女らにとって女性の抱える社会的問題があまりに身近すぎて、逆に思考の過程を妨げてしまうのかもしれない。彼女らの多くは、それまで「女性である」ことで面してきた問題に気づいていなかったのだろう。大学入学まで学生の生活の大半を占めているのは、学校という場所である。学校に関しては、「隠れたカリキュラム」と呼ばれるように、児童生徒の性別による役割分担の意識を暗黙のうちに育てる風潮がある。これに気づくのはなかなか難しく、学校生活の中でもっとも顕著な学業成績による輪切りの中で生活してきた子どもたちは、「成績さえよければ性別は関係ない。今の世の中、男女は平等」という認識を持つようになるのであろう。このように、気づきさえしなければそのまま通り過ぎていくような問題を、フェミニストたちは掘り起こさざるを得ないのである。社会的な女男の違いをもっとも簡単に説明してくれるのが遺伝的・身体的・生理的な女男の差異であろう。こうした原因に帰属しておけば、現在の状況に満足したままで生活できるのである。

本稿では、心理学的な性差がなぜ遺伝的・身体的・生理的なものと見なされやすいのか、それに対して、フェミニスト心理学の立場からどのようなことが考えられるのかについて論じてきた。フェミニスト心理学では、単純明解な「それは、女(男)だから」という説明を、心の性や社会という要因を入れて再解釈してきたのである。この再解釈は、遺伝的・身体的・生理的な説明が現状を肯定するものとして使用されることに対して、現状を変革する可能性を示唆し

たとも言える。なお、フェミニスト心理学の主張は、本稿で論じたもの以外にも多岐にわたっている。このような点については、これから論考を重ねたい。また、本稿は冒頭に述べたように、まだ未熟な論考の段階であり多くの方からのコメントや示唆などを期待している。

#### 註

- 1) このような講義の内容については、青野篤子・森永康子・土肥伊都子(1999)『ジェンダーの心理学』(ミネルヴァ書房)を参照されたい。
- 2) 本稿では「生物学的な要因」の内容に、遺伝子レベル、身体構造レベル、生理学的な機能のレベルなどを含むものとする。
- 3) 心の性に関しては、身体は女性の生殖器を備えているが自分は男性であると考えているというような場合や、身体的にも両性の特徴を備えており自分の戸籍上の性別に疑問を感じているというような場合、などのようにさまざまな状況が考えられるが、その点については他に譲りたい。

#### 引用文献

- 東 清和 2000 パーソナリティの性差. 東清和・小倉千加子(編)『ジェンダーの心理学』早稲田大学出版会 pp59-101.
- 坂西友秀 1986 帰属過程. 対人行動学研究会(編)『対人行動の心理学』誠信書房 pp113-135.
- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Bem, S. L. 1993 *The lenses of gender: Transforming the debate on sexual inequality*. New Haven, Ct: Yale University Press.
- ブラム, D. 越智典子(訳) 2000 『脳に組み込まれたセックス—なぜ男と女なのか』白揚社 (Blum, D. 1997 *Sex on the brain*. New York: Penguin Books.)
- Buss, D. M. 1995 Psychological sex differences: Origins through sexual selection. *American Psychologist*, 50, 164-168.
- 大坊郁夫 1998 『しぐさのコミュニケーション』サイエンス社 (東清和・小倉千加子編 2000 『ジェンダーの心理学』早稲田大学出版会より)

- Gilligan, C. 1982 *In a different voice: Psychological theory and women's development*.  
Cambridge, Ma: Harvard University Press.
- 北山 忍 1998『自己と感情』共立出版
- Morinaga, Y., Frieze, I. H., & Ferligoj, A. 1993 Career plans and gender role attitudes of  
college students in the United States, Japan, and Slovenia. *Sex Roles*, 29, 317-334.
- 利島 保 1987『心から脳をみる—神経心理学への誘い』福村出版
- Unger, R., & Crawford, M., 1992 *Women and gender: A feminist psychology*. Philadelphia,  
Pa: Temple University Press.
- Yoder, J. D. 1999 *Women and gender: Transforming psychology*. London: Prentice-Hall.

附記 本稿は、2000年度神戸女学院大学女性学インスティテュート研究助成金の補助を受けたものである。また、本稿の一部は、本学で開催しているジェンダー研究会にて発表した内容をもとに執筆したものである。研究会にてコメントいただいた諸先生方に感謝する。

## Summary

# How Do Feminist Psychologists Consider Gender Differences?

Yasuko Morinaga

This short article briefly describes feminist psychologists' endeavor in the past three decades to deconstruct biological determinism. Psychologists as well as college students and lay-people usually attribute psychological gender differences to genetic and physiological variables and even to evolutionary perspectives, whereas racial and ethnic differences reported in psychological papers are discussed in terms of cultural and social backgrounds. Feminist psychologists have struggled to reinterpret those gender differences in social contexts, pointing out that psychological and behavioral differences between women and men may be confounded with nonegalitarian distribution of power in society. They have also criticized positivists' research methods, especially their ideal of 'objectivity,' clarifying the role played by the researchers in their research process; research findings can be affected by the questions the researchers decide to investigate, the way they design and conduct their research, and how they deal with their data.